



講演要旨
【写 真】

だて噴火湾縄文まつり公開シンポジウム

〈基調講演〉「自然の声に耳を傾ける ー写真家の視点ー」

写真家 津田 直氏

1976年神戸生まれ。写真家・大阪芸術大学客員准教授



1. 「縄文」との距離

これまでランドスケープ、つまり風景をテーマにしたものを見たり撮影してきました。

例えば、フィンランド北部からノルウェー北部にかけてトナカイ牧夫として生活している「サーメ」という人々の文化の中で、自然と人はどういう関係性で文化を受け継ぎ、暮らしを営んでいるのかを追いかけて一冊の本にまとめたり、または北アフリカのモロッコでは風と共に暮らしている砂漠の人々に密着して、「風

と暮らすとはどういうことか」というテーマでシリーズとしてまとめてみたりと、日々、自分で見つけた視点を通して活動しています。

縄文との出会いについて話すと、僕自身は学者でもなければ、考古学を専門的に習ったわけでもないので、学術的なことを入口にしていったわけではないんです。

自然と人間の関係性をずっとテーマにしてきた中で、日本の場合、自然と人間の深い対話が成立していたのが縄文時代だろうという思いが直感的に僕の頭の中にありました。

それは、皆様から見ても、はるか1,000年という単位を幾つも超えた向こう側にある世界なので当然距離がある。もしくはどこまで私たちの方から歩み寄って縄文というものをつかむことができるのか、ある意味距離を感じてしまう世界であるとも思うのです。

でも、ちょっと角度を変えると、日本列島の長い歴史の中でどれだけ縄文という時間が長く横たわっていたかを思えば、距離は縮まるだろうと感じました。

国立科学博物館の篠田謙一先生が日本列島の人類の歴史について解説されたものによると、人類史4万年間を1年に例えたら、旧石器時代が8月のお盆くらいまで続き、縄文時代はお盆を過ぎた頃から始まり、12月の1週目まで続いたといいます。

小学校の頃から縄文という言葉を耳にしても、正直このように捉えたことはなかったですね。それだけの長い時間だったんだと。ひとつ身近な物差しとして、縄文を初めてつかみかけた瞬間でした。

さらに、鎌倉時代の終わりが12月25日くらいで、

Funkawan JOMON Festival 2016
Perspective of a Photographer
NAO TSUDA
第19回だて噴火湾縄文まつり 公開シンポジウム
写真家・津田直 講演会【自然の声に耳を傾ける -写真家の視点-】
2016.8.27 SAT 13:00▶14:30
@ Date City Culture Center , Hokkaido

だて歴史の杜カルチャーセンター 講堂
入場料:無料 申込み:不要
主催:だて噴火湾縄文まつり実行委員会 問合せ:伊達市教育委員会 文化財係 Tel 0142-23-3331

縄文まつりシンポジウムのフライヤー (クマのスプーン)

次の室町時代が始まり、明治は12月31日の0時から始まるといいます。これは一人の研究者の視点であり、一つの知識として僕に届いたわけです。

そこから何を感じられるか。ここ数年自然災害が頻繁に起きています。東日本大震災や熊本の震災、火山活動もそうですね。こういう国に暮らしながら、日々、将来・未来を考えていく中で、私たちが話していることは果たして十年単位で考えているのか、百年単位か、千年単位なのか、それによって見方が大きく変わると思ふんですね。

もっといと、明治以降にできた基準で我々が明日を、未来を考えるのなら、先ほどのカレンダーでいうところの12月31日、つまり24時間で起こったことだけで、物事を決めてしまうということです。それでいいのかという大きな疑問が今日の想いとして一つあります。

そう思った時に、せめて縄文の中で何が起こったのかは、我々が知っておくべきだと。そこで得た知恵が私たちのこれからを決めていく大きなヒントになるのではないかと思ったことが、僕が縄文をより深く知りたいと思った理由の一つです。

2. 「縄文」に惹かれた3つの理由

今日は僕が縄文世界に魅せられていった理由をお伝えした上で、実際に僕が試みている雑誌『PAPERSKY』の連載で縄文について書いたことをスライド投影しながら見ていきたいと思います。

縄文に惹かれた理由の一つは、1万年以上も縄文の流れが途切れずに続いているということを肌で感じられるレベルで知ってみたいということ。

そして二つ目は、生と死、生きている世界と死者の世界に対する行いに縄文遺跡の中でかなり明確に見えてくる部分があること。私たちが死をどう捉えるかというヒントも縄文には数多くあり、生と死という視点で強く惹かれていたと思います。

そして三つ目は命に対しての敬意、死者に対しての「送り」や、敬意といったものが、身体だけを送るではなく、そこにいた人の想いや思想が精神世界の中で吸収されていく中で、さらなる思想的なものが展開していたということが、死の世界の向こう側に見えるような気がしています。

この三つのことが縄文のことに対する理由になつていったといえます。

3. フィールドワークから見えてきたもの

6年前、秋田に住む友人に「縄文の時間と向き合つてみたいんだけど、どこから歩き始めたらよいだろうか」と話したことがあります。そこで秋田を訪ねて、畠でフィールドワークをしました。

歩き始めてすぐに自分の足元に土器片を見つけました。カメラを低く構えると、雪が溶けて土の自然の力で、ふっと土器片が表面に浮かび上がってくるような風景が見えました。このあたりに縄文の人たちが生活していたことは想像していたけれども、実際に目の前は「土器片と共に野菜が育つ」というような環境で、それが僕たちと縄文の時間というのはそんなに遠いところにないんだと感じさせました。

この連載では縄文人が立っていた場所に立って、そこから何が見えるかということを試みています。そして、時には実際に出土したものをガラスケースの中から出してもらい、直接触れて肌から感じ、僕の中で非常に惹かれたものや、見つかった時の状況の話などを写真と共に綴っています。

この『PAPERSKY』という雑誌は編集長が外国人で、読者は若い層も多いので、これから将来を見つめるヒントがあるのではないかとの思いで「縄文フィールドワーク」という連載を担当しています。遺跡の有名・無名に関わらず、「縄文の欠片かけら」が各地にあると思うので、それを拾うようにして、学術的な難しい話よりもっと我々の日常に近いところにあるものを掬いながら文章を書いて紹介しています。

例えば、反響があったものとしては、岩手の大船渡で縄文の集落跡を発掘調査しているところを撮影させてもらった回です。

東日本大震災では津波によって大船渡でも多くの人が亡くなられました。特に沿岸部の方です。ちょうど家が20数軒失われた場所があって、1年経つて家を高台に移転するという案が出たんですね。大船渡では標高15mくらいの高台の林を切り開いていくと、縄文の遺跡が発見されました。

計画としては、これから生活するのに早く家を建てたいわけですね。でも縄文遺跡が出来てしまったことで、発掘調査を行うことに首を傾げた方もたくさんいました。新聞にもそういう情報が載ったと思うんですが、僕はまったく違う見方をここではしていました。

高台の縄文遺跡には津波の形跡はなかったわけですね。つまり、もともと人はここに暮らしていて、例えば水産業とか色々な理由で海の近くに母屋を移して

といった時期があったんだと思うんです。そしてここは村ではなくなってしまった。

今回の津波をきっかけに高台にもう一度人々が戻ってきた時に、そこには長く生活した人々の形跡が残っていて、ここは安全な場所だと教えてくれているんですね。

でも家を失って待たれている方にとっては遺跡が見つかり、家を建てる計画がさらに引き延ばされ複雑な心境になったと思うのですが、これは伝え方次第だと正直思いました。そして「この遺跡から見えてくること」について発掘している方々と話をして、許可を取って写真を撮りました。

写真家として各地にてフィールドワークを行い、縄文のかつての時間と今日を繋ぐきっかけになるシーンを拾いながらこれまで4年ほど連載してきました。

4. 縄文時代に培われた思想の原点

4年前、新潮社の『芸術新潮』が縄文を特集した時、僕から哲学者で歴史学者でもある梅原猛さんに声をかけさせていただき対談を行いました。「縄文が世界を救う」と題して、森から学ぶことであったり、生と死の観念についてなど3時間くらい京都で対談しました。中にはアイヌ民族の話や、縄文を通して何を私たちは見るのかという話が出ました。

例えば森のリズム、つまり森の生と死についてです。僕から話したのは、大きな木が倒れた時に森で何が起こるかというと、空がぽっかりと空いて太陽光が今まで届かなかつた小さな草木にまで差し込むようになって、その光を受けて最も小さな命というものが、その倒れた木の周りに生まれていくんだと。大木の栄養素までもがその森の次の命を育む一つの大きな力になっていくということ。

管理された森では倒れた木は危ないから撤去したりするかもしれないけれど、命の循環という意味では、実際にそれは退かしてはいけない「死」なのかもしれないとか。「大きな死があった時は、そこに次に待っている命が力をつける時なんだ」という話など。

縄文というテーマで始まった話でしたが、日本人の思想的背景としてある「森」であったり、死に対する儀礼のことだったりと、縄文時代に耕された思想の原点に話が及びました。

5. 現代と縄文をつなぐ

雑誌連載を通して縄文歩きが続いているが、昨年

度にも現代と縄文をつなぐプロジェクトとして二つの展覧会を行いました。

一つは「青い森から、繋ぐ」という展覧会で、三内丸山遺跡で出土した通称「縄文ポシェット」をモチーフに現代版縄文ポシェットを作ったもので、老舗の鞄屋である「吉田カバン」と共働で行ったものです。

もう一つ、東京での展覧会「Grassland Tears (草むらの涙)」があります。

会場の中には壁の低い位置にも写真を点在させました。例えば、クマのスプーンはお墓の中から出てきたもので、子供のために贈られたのではないかといったような、僕が専門家から伺ったエピソードが展示のアイディアに繋がっています。

中でも、黒曜石を撮影したものは、あえて像の階調を反転させて(ネガ像として)発表しています。

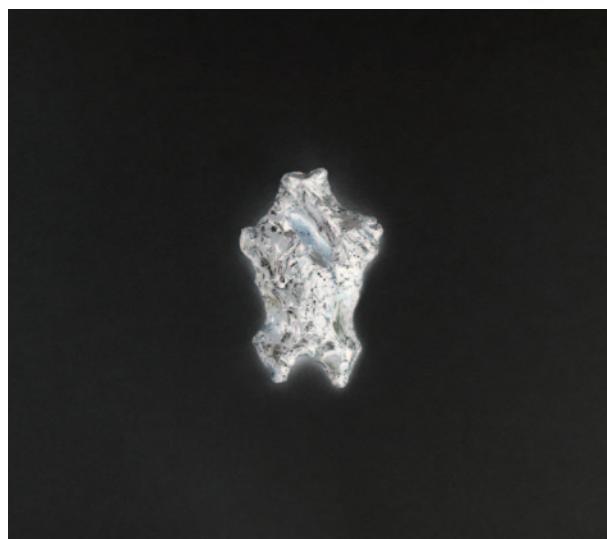
つまり闇の部分は光、そして光の部分は闇になるという見え方となっています。(写真下)

なぜこのようなことをしたかというと、黒曜石は、天然ガラスですからもともとエネルギーの塊としてあったマグマの時には相当の光を放っていたんだろうと感じたので、あえて反転させました。

これらは縄文について伝えていくときに、本来縄文人が見ていたような視点を見出すことができないかという試みとして行いました。

また、注口土器(表紙)の場合においては左の方には男性のシンボルが見られ、隣り合って見つかったもう一つの土器の下部(写真次頁)には穴が開いており、女性の身体をモチーフにしていると思われたので、男と女という根底にあるテーマを引き出すために片方(女性)の土器の写真のみを反転させました。

色を調整したのではなく、普通に撮ったものを反転



Grassland Sun, Takasago #1



Grassland Sun, Yagi B #2

させたらこのように人肌のような色味となり、はっとさせられました。

写真家の仕事はあるものを記録するものと捉えられがちですが、僕が考へている写真というのは、縄文ポシェットでもそうでしたが、何かと何かを繋ぐために写真を表現の手段としてきました。

人と自然の関係性について写真を通じて結び直すことで、より本質が見えてはこないだろうか。消えかけた文化を写真が引き受けて次の世代に渡していくことができないだろうかということを思いながら写真を撮り続けています。

6. 「もの」を「物語」としてみること

今まで僕にとって、縄文というのはとても大きな言葉でした。1万年という想像もつかない長さであったこと。縄文人といえば、現代人の誰一人として彼らと出会ったことがないということ。ただ、撮影が5年を過ぎた時に、縄文人という言葉ではなく、彼とか彼女という一人の人、向こう側にいる一人の人の存在を想うようになったんですね。

三内丸山遺跡で出土した縄文ポシェットの中にクルミが入っていて、携帯食だったのかわからないですけれど、それを腰につけていた人のことなどを考えて数週間過ぎていったり、男性と女性の器では、一つの家族のことを想像したり、彼という存在を想像したり、つまりは向こうに一人の人がいるんだということが、ものを見て感じるようになったのがこの1年間の大きな変化だと思います。

どこまで、僕と縄文の世界を縮められているかわからないですけれど、ものをものとしてみるのではなく、「もの」を「物語」としてみていくことが大切だと感じ始めています。

縄文・縄文時代・縄文人という大きな言葉ではなく、例えばそこに一人の子供の顔を想像したり、そこにいないけれども最後に触れていた人たちのことが見えない限りは、写真を通しての「繋ぐ」にはならないなと思って、ずっともがいてきました。

ただ、今は一人の人を感じ始めた以上、これは続けていこうと思いますし、発表していく中で、1万年の中にあった思想の欠片を、写真を通してなんとか形にできないかと思いやっていきます。

Q：落ち着いたトーンの写真が多いですね

もしかするとそれはスローシャッターのせいかもしれません。僕がものを見るとき、風景を撮るときでも言えることですけれども、写真を撮るということはどれだけそのものを見つめていたいか、そこにどれだけ時間を与えられるかということでもあるのです。

例えば、クマのスプーンの写真の場合、ライティングを組んだ光を使って、何百分の一秒で写すこともできてしまうんです。でもそれは実は一方通行なことで、そんな風に扱うべきものではないんじゃないのかと。「もの」と向き合うにはある程度それを眺めるのに時間が必要ではないか。僕にとっては、数十秒くらいかけて染み込むような撮影時間がないといけない対象だったんです。

風景を撮るときでも7分間必要だと思ったら7分間のシャッター速度から僕の作業は始まります。普通はそれでは写真は成立しないと思われるかもしれませんのが、フィルムで写真術を学んだ僕にとって、弱い光の中でも十分にコントロールする方法がいくつもあるの



Taka Ishii Gallery Photography / Film 「Grassland Tears」 個展 展示風景

で、「目を瞑る」ように、内側に何か想いが積もっていくように写真を撮っていました。

Q：反転した土器の孔から漏れ出した光は命の輝きと捉えてよろしいですか？

これはあるアクシデントによるものですが、光の階調を反転しようと思い至ったきっかけになったものです。函館市縄文文化交流センターで貴重な資料を見せてもらい発掘当時の話などをうかがっているうちに、日が暮れてしまったんです。

日が沈む、わずかな青い光の中だけで撮影したので、出来上がりはほぼ真っ青な写真でした。ただ、そのネガ像を見た時にエピソードで聞いた「男と女」の世界がまさにそこにあったんです。

撮った時は青い光だけで、孔は真っ暗でほとんど目立っていませんでした。そう、孔の中は闇でしかないんですね。でもネガ像になった時に光がこぼれ落ちそうで、中にあるすごく光が詰まっているというか、土器全体からはふくよかな女性の身体のようなラインを感じられて、中が十分に満たされているように見えた。これは本来そういうものだったんだというのが、反転した像であった時だけ見えてきた。

縄文ということを紐解く中で今日に結びつけるとい

う話を何度もかしましたが、やはりそこには思想的なこととか、縄文人の目の内に映っていた光景を想像し、できるだけ含みたいと思って撮っているので、アクシデントは結果的に一つのシリーズを制作していく上で大きな発見と兆しを感じさせてくれました

最後になりましたが、先程お話しした「Grassland Tears (草むらの涙)」という写真作品のシリーズは出土した遺物と風景写真で構成しましたが、東京のギャラリーで展覧会を終えたいま、今後は海外での展覧会の準備を進めています。いつか一冊の写真集にもまとめたいと思っています。今後の展開を楽しみにしてください。

協力：PAPERSKY

Taka Ishii Gallery Photography / Film
函館市縄文文化交流センター

入江・高砂貝塚館

助成：公益財団法人テルモ生命科学芸術財団

(第19回だて噴火湾縄文まつり公開シンポジウム 2016年8月27日)